

新大英図書館とミッテラン図書館について

土倉莞爾

はじめに

「旅行でもしたら好いのに」。これはゼミの学生たちに投げかける私の言葉ではない。昔、学生時代に、友人が私に勧めてくれた言葉である。学生時代の私は旅行など考えたこともなかった。それはお金がなかったこともあるだろう。しかし、旅行好きの人はお金持ちとは限らない。例えば、芭蕉に見られるように、旅に出たい衝動が旅に出させるのだと思う。学生時代の私は何をしていたのだろうか、今頃ふと考えることがある。ゼミ生たちを通して今日の学生諸君を見ていると、学年が上になるにしたがって「就活」（就職活動）が中心事になって行く。ところが私は学生時代、怯えていたのであろう、「就活」なるものを一切しなかった。恥ずかしい話である。今になって考えると不思議な気持ちとする。多分、その頃は不況で「就活」はあまり面白くなかった一般的雰囲気はあったのだが、やはり「就活」から逃げていた自分は否めない。司法試験や行政試験もなぜか受ける気がしなかった。結局、過去を美化しているかもしれないが、私は、大学4年生の時は、図書館に通うか、映画館に通うかであった。それしか能のない学生だったのである。高い天井のある広いかなり古めいた大学図書館に通った当時、今は懐かしい。

さて、この冬、私はヨーロッパを旅行したが、久しぶりに図書館通いに終始した。旅と図書館、これはまた考えてみれば矛盾する話である。図書館に行きたければ旅など無駄だし、旅をするなら図書館などに通う暇はないはずである。とはいえ、考え方によれば、ある調べ物をするために遠い旅に出るというのもあって好いし、旅先で美術館を訪れるように、その地の図書館を訪れてみるのも印象深い旅になるかもしれない。最近の私はそんな心境になっている。また、学生時代と違ってよく旅をするようになってきている。それにしても、本稿のメイン・テーマである図書館とは何だろう？しばしば私は考える

ことがある。以下、最近読んだ新聞の社説から話を始めさせていただきたい。

「唯一の国立図書館である国立国会図書館ができて、60年たった」と2008年12月30日の『朝日新聞』社説は書き始める。社説によれば、その国会図書館が近年大きく変わっていると言う。「電子図書館」機能が充実し、インターネットで、誰でもどこからでも膨大な書誌データを検索したり、国会議事録を読んだりできるようになった。また、国会を助ける仕事の重みが増して来ているとも言う。すなわち、2007年度に議員が依頼した資料集めや分析は4万5千件。議員の立法活動が活発になり、1995年度の2倍以上だと言う。社説はこう締めくくる。「国会図書館は国民の知の財産だ。その基盤を厚く強くして、次代に渡す責任がある。必要な手当てを急ぎたい」。その通りである。ただ、ここで、「手当て」ということではなく、発想の問題として、何故、国立「国会」図書館なのか？という疑問を提出してみた。「国会」図書館ではなく、「国民」図書館、せめて「国立」図書館という呼称になぜならないか？という単純な疑問である。もちろん、日本の国立国会図書館は、戦後占領時代の1948年に、アメリカ文化使節団の勧告により、このアメリカ議会図書館をモデルとして造られたことは承知している。しかし、そろそろ、思い切って国民的な（市民的な）図書館設立の構想があってもよいのではないだろうか？

同じ頃、『創文』516号（2009年1-2号）に掲載された亀長洋子「イタリア文書館『お宝探し』の楽しみ」にも感銘した。少しだけ引用する。「他国では県立州立の文書館がそれぞれの地域を代表する文書館である場合が多いと想像されるが、イタリアでは、州より細かい単位で地方文書館は国立文書館の形で整備されており、規模の差は大であるが、その総数は百を超える。文書館ごとに、保存資料の分類の基本項目も大きく異なり、残存資料の分類項目自体が、その地域の歴史を語りうる一面を有している。そして国立文書館のほかにも、市立図書館、大

学図書館、聖界関係機関など、古文書を保存している団体はもちろん数多く存在する」。

私の率直な感想は、驚異のイタリア国立文書館という礼賛である。約めて言えば、日本でも文書館「お宝探し」はできるのだろうか？という疑問である。前書きが少し長くなったが、以下に記すのは、私が海外出張中に立ち寄った二つの国立図書館の浅薄な印象記に過ぎない。独断的な印象記にならぬように、ガイドブック等で叙述を補ったところもあることを、あらかじめお断りしておきたい。

1 新大英図書館

ヴァインフリート・レーシュブルク著（宮原啓子・山本美代子訳）『ヨーロッパの歴史的図書館』（国文社、1994年）によれば、「大英博物館の名は、世界中に知られ高い評価を受けている。ここは始めから図書館と博物館とが一体となっていて、すべての時代、すべての専門分野、すべての国々から集めた図書、芸術品、博物標本の保管庫であった。創立はハンス・スローン卿（自然科学者で、かつての王立協会の会長）が、彼の個人的コレクションである4万冊の蔵書、3千5百冊の写本および20万点の博物標本、何10万個の貨幣、メダル、絵画それに古代の遺品の数々を、イギリス国民へ遺贈した18世紀にさかのぼる。このコレクションに他の三つのコレクションが加わり、1759年に大英博物館が誕生したのである。膨大な寄贈や相次ぐ購入の結果、この博物館は世界で最も豊かな学術コレクションへと成長した。1823年から1856年にかけて、今日の新古典主義様式の大英博物館のかたちが出来上がった。113メートルの長さの正面には列柱が並び、35メートルの高さの円天井がある円形閲覧室（Round Reading Room）は画期的である。アントニオ・パニッツィ [館長・文学史家] のもとに、図書館の計画的な拡張工事が開始され、大英博物館は国立図書館の地位を獲得するにいたった」。

アルベルト・マンゲル著（野中邦子訳）『図書館—愛書家の楽園』（白水社、2008年）にもアントニオ・パニッツィに関する記述がある。少し引用する。「大英図書館誕生をめぐる物語の主人公は、イタリア生まれのアントニオ・パニッツィである。パニッツィは国民すべてに門戸が開かれた国立図書館を作るには国家が資金を提供すべきだと考えた。1836年の報告書でこんなふうに述べている。『学究

心を満たし、論理を迫及し、資料にあたり、こみいった疑問について考慮するにあたっては、たとえ一介の貧乏学生でも、この国最高の資産家と同じ資料、同じ書物を用いてもらいたい』。1856年、パニッツィは昇進して主任司書となった。やがて、彼は持ち前のすぐれた知性と運営の才を生かし、大英図書館を世界最高の文化機関に生まれ変わらせるのだった」。

大英帝国が拡大し続けるのに伴い、世界中の印刷物が図書館に集まり、蔵書数は急激に増加した。所蔵印刷本総合目録を1880年から1905年にかけて印刷したことで、閲覧者にとってはこの増大した蔵書の利用がより便利になった。しかし20世紀中も図書館の規模が拡大し続けたため、膨大な蔵書を安全に保管、保存するという問題に対するあらたな解決法が模索された。そこで1905年、新聞類はロンドン北部のコリンデル通りに留まり、その他一部の印刷本コレクションはロンドン市内の数箇所に外部保存されることになった。

大英博物館から大英図書館への発展をここで振り返っておきたい。大英図書館は、1972年に成立した英国図書館法に基づき、1973年に創立された。正式には、大英博物館図書館、国立中央図書館、国立書誌局、国立科学技術参考貸出図書館、科学技術情報局を中心に複数の機関をひとつの組織にまとめたものである。それまでは大英博物館の中庭の円形読書室が英国を代表する図書館として象徴的役割を担っていた。大英図書館が組織として整えられた1973年の段階では、建物自体はまだなく、大英博物館の読書室などが引き続き用いられていた。大英図書館が大英博物館から実際に分離独立したのは1998年4月のことである。この新しい国立図書館は、ロンドンの大英博物館やヨークシャー州ウィザビー近郊のポストン・スパーを含め数箇所に分散して機能していたが、英国政府は1975年にセント・パンクラス駅の隣に敷地を入手し、ロンドンにある大英図書館所蔵書の大半を一個所にまとめ、図書館利用者の利便と蔵書の保存、保管能力を向上させる新図書館を建設することにした。サー・コリン・セント・ジョン・ウィルソン教授設計の新大英図書館の閲覧室は1997年一部開設した。この新大英図書館は約1200万冊にも及ぶ蔵書の永久的な保存場所を提供し、11の閲覧室で年間何万人もの利用者を迎え入れることになり、また世界中からの来館者には、大英図書館の卓越した至宝の一部を展示ギャラリーで鑑賞できるよ

うになっている。



新大英図書館外観

2008年秋、私はパリからユーロ・スターに乗り、セント・パンクラス駅に降り立った。すぐそこに新大英図書館が見える。私のロンドンの定宿はラッセル・スクエアにあるが、セント・パンクラス駅から歩いて10分の距離だった。実は、ユーロ・スターがロンドンの新たな発着駅として、セント・パンクラス・インターナショナル駅の使用を開始したのは2007年11月14日からである。これは、それまではウォータールー駅の発着が移行したものである。この結果、新大英図書館に通うことがすこぶる便利になった。それまでの私は、ヒースロー空港からラッセル・スクエアの常宿まで地下鉄を利用していった。かなりのエネルギーを費やしていたのだが、ユーロ・スターが新大英図書館のすぐ近くに着くことになったことによって、図書館利用の時間がずいぶん無駄なく多くなったことは喜ばしいことである。

新大英図書館の面積は、建物部分が約3.1ヘクタール、その他が約2ヘクタールである。これは、ほぼ東京ドームの敷地面積に匹敵するものであると言われている。赤い砂岩でできた前廊を入ると、そこは広場になっている。ここは図書館を利用する人にとっても、しない人にとっても憩いの場になっているだけでなく、交通量の多い図書館前のユーストン通りと図書館本体との間にあって、騒音の緩衝地帯となっている。新大英図書館は一つの観光名所になっているのだろうか、明らかに旅行者と思われる人たちがこの広場に集まっている。また、朝早く行くと、開館を待ちわびる人たちが、立ったままでパンを食べるとか、コーヒーを飲みながら、一時を過ごしている光景を目にすることができる。もちろん

広場には飲食の売店もある。

玄関の入り口では簡単な持ち物検査を受ける。靴の中身をちょっと見せる程度である。図書館の中に入るとエントランス・ホールが広がっている。正面には総合案内が、左手には売店とピアソン・ギャラリーがある。総合案内の左手にある階段を上った中二階には臨時の展示スペース、コーヒーショップ、王室文庫、サー・ジョン・リトバルト・ギャラリーがある。図書館の内部は閲覧室以外の部分が広く一般に開放されており、展示スペースには、バッグ等の所持品を持ったまま誰でも自由に入ることができる。



総合案内

さて、閲覧室であるが、さきに述べたように、11の閲覧室に年間何万人もの利用者がつめかけている。利用者は私の見るところ世界各国から押しかけているように思われる。人種・服装・年齢等、実にバラエティに富んでいる。余談であるが、地下鉄であらゆる人種と宗教の人たちを見かけるのは日常的な光景で、ある意味、ロンドン小さな国連のようになりつつある。最新の国勢調査によると、ロンドンの総人口の四割は外国生まれであるという。ロンドンの人口は長らく減り続けていたが、このところ急速に増加し始めているそうである。

私もこの閲覧室が大変気に入って、ロンドンに行くたびに、大英博物館とならんで新大英図書館の閲覧室で時間を過ごすことを無上の楽しみにしている。私がかつて利用しているのは「社会科学」閲覧室や「アジア・アフリカ」閲覧室である。

閲覧室に入室する場合には利用証が必要である。利用証の発行受付は中二階東側に専用の部屋がある。利用証を入手するためには二種類の証明書が必

要である。ひとつはパスポート、もう一つは本人の現住所確認である。本人の現住所確認は意外と困難で、例えば私の場合、関西大学図書館の紹介状を持参していたが、紹介状には私の住所など記入されてはいない。関西大学教職員証もここでは役立たない。しかし、心配ご無用。住所の記入された日本語の公共料金通知書を用意しておけば、日本語のできるスタッフもいるので受け付けてもらうことができる。

さきほど、館内にはコーヒーショップがあると書いたが、ちゃんとしたレストランもある。しかし私は利用したことがないのでどんなものか知らない。つまり、利用証さえあれば閲覧室は自由に出入りできるから、昼食は外で取ることを常としている。ロンドン市内にはあらゆる民族料理のレストランがある。本場よりおいしい料理を出す店も少なくないと言われる。世界最高のインド料理を食べたければロンドンに行くとインド人が笑い話にするほどだそうである。私も新大英図書館近くに多数あるインド料理店でよく昼食を取った。その他、少し足を伸ばして、ラッセル・スクエアにある中華料理やフランス料理を楽しんだこともある。もっとも、何れも安価なレストランだから本場よりおいしかったと書けば嘘になる。

さて、例えば、「社会科学」閲覧室に入るためには、さきに述べた利用証が必要であるが、荷物は中地階にあるコインロッカーに預けて、研究に必要なものだけを無料で使用させてもらえる厚手のビニール袋に入れて、閲覧室の入り口で検査を受けることになる。閲覧室には筆記具は鉛筆だけ許可され、ボールペンやカラー・マーカーは不可である。とはいえ、ノート・パソコンは可で、どちらかと言えば、多数の人たちが各自パソコンを持ち込んで熱心にノートをとっているのが現在の閲覧室風景である。

閲覧室での読書に疲れたら、ミュージアム・ショップで様々なグッズを買ってみるのも記念になるだろう。私もゼミ生へのお土産としてチョコレートをここで買った思い出がある。また、卓越した至宝の一部を展示ギャラリーで鑑賞するのも楽しみである。私は無粋でまだ果たしていないのだが、機会があれば見てみたい至宝をガイドブックから抜粋して列挙すると、『シナイ写本』、『ガンダーラ仏教典』、『ゲーテンベルク聖書』、『マグナ・カルタ』、『レオナルド・ダ・ヴィンチのノート』などであろうか。

最後に、新大英図書館でも資料のデジタル化が進

み、貴重な文献も一部は <http://www.bl.uk/online-gallery> というホームページで見ることができることを付言しておきたい。

2 ミッテラン図書館

あらためて、レーシュブルク『ヨーロッパの歴史的図書館』によれば、「モザイク飾りと百合と紋章付きの豪華なモロッコ革製本が、16世紀初期のこのコレクションの起源について思い起こさせる。『王の図書館』は、1576年にパリに移され、1720年にはリシュリュー通りにある、今日の建物群の一翼に収められた。フランス革命で接収された修道院や貴族の所蔵品がこの図書館の蔵書を著しく増加させたことは特記すべきであろう。このコレクションは、18世紀末には全世界の図書館の首位に達した。……小さな玄関ホールを通過して、国立図書館の閲覧室(1868年に完成)に入る。この図書館は19世紀の建築として、また図書館の建造物としても屈指の作品のひとつとされている。……旧マザラン宮殿を増築してつくったこの図書館はアンリ・ラブルーストが大英博物館の円天井の閲覧室と書庫、それにパリのパンテオン広場にあるサント・ジュヴィエヌ図書館の金属構造を模範として、20年の歳月をかけて建てたものである。彼の感銘を与えるような創造力と空間に対する大胆な構想は今世紀にいたるまで国内外の多くの図書館建築に影響を及ぼしたのである」。

ここに叙述されたこの由緒ある1367年にシャルル5世によって創立されたビブリオテーク・ド・ロワ(王立図書館)を起源とするこの図書館が、私が初めて渡仏した時(1977年)のBNと呼ばれた国立図書館である。実は、私はパリ政治学院(シアンスポ)の図書館を利用していたので、このBNには結局行かなかった。ところで、このリシュリュー通りのBNは今や旧館と呼ばれるようになった。

この旧館について、辻由美『図書館であそぼう』(講談社現代新書、1999年)は次のように書いている。「旧館があるのは、セーヌ右岸、パリのほぼ中心部の大通りから少し脇に入ったリシュリュー通り。1720年からずっと図書館がおかれてきた場所だが、新館ができたからといって、こちらのほうが役割を終えたわけではない。写本、版画、写真、地図などのいくつかの部門はこちらのほうに残される」。

すなわち、フランスの国立図書館(BN)とフランス図書館(BDF)が合併して再出発したフラン

ス国立図書館（BNF）は、1996年末、首都パリから切り離されたような古い荒れ地のパリの13区トルビアックに新館を開館した。名付けて「フランソワ・ミッテラン図書館」（BFM: la Bibliothèque François-Mitterrand）という。

1980年代、故フランソワ・ミッテラン大統領はルーブル美術館大改造、新オペラ座建設（オペラ・バステュー）、グランダルシュ建設など、巨大な文化施設を複数建設しパリの面目を一新するパリ改造計画、「グラン・プロジェ」を立ち上げた。1988年7月14日、フランス革命記念日の演説で、ミッテランはルーブルやオペラ座など先行する事業に続き、手狭になったフランス国立図書館を新築して世界最大の規模に拡大する計画を発表した。

ミッテランが、「全く新しいタイプの図書館」の構想を発表してから8年の歳月が流れた後に、リシュリユー通りの旧館と合わせてフランス国立図書館は、アメリカのLCに次いで世界で二番目に大きな図書館になった。「フランソワ・ミッテラン図書館」を含め、フランス国立図書館の所蔵資料は1300万冊にのぼる。雑誌は35万タイトル、マイクロフィルム

76,000巻、マイクロフィッシュ95万枚、デジタル化資料10万点、マルチメディア資料28,000点。デジタル化された静止画像30万点、音声資料100万点、ビデオ資料62,000点等である。このようにして、フランス国立図書館は、2区のリシュリユー通りにある旧館と、13区のベルシー地区（トルビアック地区）にある本館（ミッテラン図書館）からなっているといえる。

フランス国立図書館の新館建物は1994年に完成したが、リシュリユー通りの旧館などからの1000万冊を超える書籍や資料の移転作業が続き、一般に公開されたのは1996年12月20日である。この図書館のセーヌ川に面したクールな姿は、さびれたベルシー地区の様相を一変させた。もっとも、あまりクールすぎて、周囲のさびれた様相が一変するほどには到らないのではないかという観察は現在でも可能かもしれない。

ミッテラン図書館の設計はドミニク・ペロー（Dominique Perrault）だった。フランス人建築家のドミニク・ペローは、1953年、エンジニアの家に生まれ、絵を描いて育った。1978年、パリ・第6建



ミッテラン図書館外観

築大学（エコール・デ・ボザール）を卒業した。卒業研究は「19世紀後半のパリの20の区役所について」であった。この時からフランス政府公認建築家になった。彼は1980年から国立高等社会科学大学院で歴史を研究した。研究テーマは「18世紀の修道院について」であった。1981年に建築家として自らの事務所を開設した。1989年にフランス国立図書館、国際設計競技で一等当選して脚光を浴びた。1992年にはベルリンの体育施設でも設計競技で一等当選した。フランス国立図書館の完成は1995年、ベルリンの体育施設完成は1997年だった。余談であるが、2009年2月28日の『朝日新聞』に、東京日仏学館で大野秀敏と対談したペローの発言が紹介されている。彼によれば「建築家の役割は建物を造るというより、建物を通して都市を変化させる手段を発見すること。現在に対して、何ができるかに関心がある」。たしかに、ガラスのタワーの間に雑木林のような巨大な中庭を備えたミッテラン図書館にもそうした問題意識が流れているように思われる。

さて、ミッテラン図書館は中央の中庭部分（12,000m²）をくりぬいた形の基礎と、本をひろげた形の4つの塔（高さ80m）から成り立っている。新しい図書館は長方形の敷地の片側に「本を開いて立てたような」L字型の、高さ100mのガラス張り超高層ビルが4棟向かい合い、4棟の総延長は400mに達する。中央に長方形の中庭が掘り込まれ、周囲を地下閲覧室が囲んでいる。

辻由美の前著から少し引用しておこう。「図書館の4つの建物は、長方形のちょうど4隅になるように配置されており、その真ん中は大きな窪地といった感じで、そこには、マツ、ナラ、クマシデ、シラカバなどの樹木が植えこまれている。赤いモケット張りの広々とした入口ホールや通路、華やいだ感じの閲覧室、この新しい図書館は、歴史の重みが刻み込まれた旧館とは何から何まで違っている」。

「ミッテラン図書館の四塔のビルは本を、四塔を結ぶ空間は巨大な『無』を表しているのだとか……、素敵な作りですが、使いにくくありませんでしょうか」と日本人のフランス政治研究者から手紙もらったのだが、そんな感じではなかった。むしろ、広く、明るく大変ゆったりとした非常に贅沢な図書館という印象であった。ここは、パリの辺境に位置しながら、現代的な別のパリを思わせる「新パリ空間」が存在すると言い得ようか。

私は、カルチェ・ラタンの定宿のホテルから、地

下鉄のケ・ド・ラ・ガール駅を降りてミッテラン図書館に通ったのだが、地下鉄を乗り換えて7駅、地下鉄と言っても高架のところもあるから乗り降りが大変で、歩いた階段（健康のためにエスカレーターには乗らない）は数えてみたら250段を越えた。

ケ・ド・ラ・ガール駅から、セヌ川の河岸を右に見ながら少し歩いて、入口のある見晴らし台（60,000m²）にたどりつくまでに、巨大な階段を登る。東入口と西入口があって、私は西入口を利用した。入り口では空港さながらの厳重な持ち物検査を受けるということを聞いていたが、そんなことはなく、単純に鞆の中身をちょっと見せる程度ですんだ。

中庭のある基礎の部分は二層に分かれていて、上が一般利用者用の閲覧スペース（オ・ド・ジャルダン、Haut-de-jardinと呼ばれる）、下が研究者用の閲覧スペース（レ・ド・ジャルダン、Rez-de-jardin）である。



レ・ド・ジャルダンの廊下

オ・ド・ジャルダンの開館時間は、火曜日から土曜日の10:00~19:00と日曜日の12:00~18:00となっている。16歳以上の資格保持者に開放されている。入館のチケットは、入口ホールのカウンターか、自動販売機で買う。利用料は1日3,3€、15日間、20€、1年、35€となっている。ただし、求職中の者、RMI（マイクロエレクトロニクス・情報計画）の受益者、社会保障の受益者、身障者とその付添人、書籍や文献を専門職業とする者は免除される。また、学生、16歳から25歳までの若者、シネマテークの自由通行証の保持者は割引料金となる。年間利用資格保持者にはミッテラン図書館で催される展覧会に自由に入場できる。

オ・ド・ジャルダンには1600の閲覧席があり、開架図書38万冊、2,450タイトルの雑誌の開架コレクションがある。全ての分野でマイクロフォーム、デジタル化資料を参照できる。哲学・歴史・人文科学、法律・経済・政治学、新聞・ジャーナリズム、科学技術、文学・芸術、視聴覚、書誌検索サービスの分野ごとの部屋に分かれており、全部で10の閲覧室がある。弱視の人のための拡大鏡がどの閲覧室にも備えられ、6つある防音のキャビネの中では付き添い者に音読してもらうことができる。オ・ド・ジャルダンの資料は、一部を除き全てコピーすることができる。複写は40ページまで。白黒A4版は0,15€、白黒A3版は0,30€、カラーA4版は1,50€となっている。

レ・ド・ジャルダンの開館時間は、月曜日の14:00~19:00火曜日から土曜日の9:00~20:00となっている。レ・ド・ジャルダンでは、研究者のために2,000席が用意され、48万冊に達する開架資料を含めた所蔵資料の利用ができる。1998年10月8日オープンした。レ・ド・ジャルダンを利用する者は、18歳以上で、大学か職業か個人かを問わず研究目的を持っていて図書館蔵書の利用が必要な者でないといけない。入場には入場を認定されたことを証明する閲覧カードが必要である。しかも、この閲覧室の座席は予約制になっている。利用する図書も座席からコンピューターで取り寄せ、未返却の場合は出口でチェックがかり退館できない等、すべてコンピューターで管理されている。私はもっぱらそこで閲覧した。閲覧したと気安く書いたが、自分の閲覧席を確保するまでが大変だった。

私の経験をここで書かせていただくと、まず、関西大学図書館長の紹介状(英文)を持って、受付に行くと、東入口すぐの所にある閲覧案内室に行けと言われる。そこでは、マンツーマンで閲覧の方法を指導してもらえる。私の場合、40歳代の美貌の女性司書が、明瞭なゆっくりとしたフランス語で懇切丁寧に説明してくれただけでなく、実際に館内を連れ立って案内をしてくれた。閲覧カードの取得も彼女が傍で指導してくれたからできたのである。すなわち、パスポートを出し、顔写真を撮られ、日本の住所を記し、会計に料金を払うところまで付き合っていた。

「なぜ、現代政治を研究するのにこの図書館に来たのか?むしろパリ中心部ヴォルテール河岸通りにある『ドキュメンテーション・フランセーズ』(フラ



受付カウンター

ンス記録館)のほうが好きはないか?」という苦い質問もあったし、文献検索室へ行くように勧められ、その部屋の同僚への小さな紹介状に「不確かな(embrouillé)フランス語を話す日本人」と添え書きされていたのは面目のないところであったが。

さて、閲覧室で読みたい本をコンピューターで取り寄せる点について詳細を説明しておきたい。フランス国立図書館のコレクションは、今日では、大部分、電子化されたカタログである「BN - Opale Plus」(BNオパールプリユ)に目録化されている。このカタログには、2008年現在、1700万の部冊を目録化した1200万以上の書誌が電子化されている。このカタログは、また、文献項目にアクセスすると4700万以上の必要項目(著者、タイトル、標識)の多数の情報が得られる。このカタログは総ての閲覧室で検索可能であるが、同時に、<http://catalogue.bnf.fr>のサイトで検索可能である。

私の経験をここで書かせてもらおうと、私の読みたい文献を閲覧室の片隅に十数台備え付けられた「BN-Opale Plus」で探すわけだが、コンピューター操作のツールが日本とは少し違うので最初は戸惑った。しかし、どうやら意中の文献を探し出して、請求のボタンを押す。自分の閲覧カード番号をインプットしておいて、座席に戻って読書している間にしばらくして、机に供えられた緑色のランプが点滅する。文献を取りに来いという合図である。余談であるが、日本に帰国して「BN-Opale Plus」を試みたら実にスムーズに検索できた。

館内には、特約業者に託された書店(librairie boutique)とレストランが置かれている。レストランはセルフ・サービス。書店では、レファレンス資料や、マルチメディアの著作物、カタログなどの図

書館出版物等が扱われていたが、残念ながら充実した書店とはとても言えないことは記しても許されるだろう。

フランス国立図書館の大きな特徴として、世界中から閲覧できる電子図書館『ガリカ』Gallicaも運営していることをあげなければならない。現在は10万点の電子資料に加え、辞書・百科事典・定期刊行物が提供されている。資料の電子化は19世紀のフランスの著作を対象としており、有名な哲学、文学的資料を優先的に、将来的には20万点を電子化していく予定である。さらにフランスを中心としたヨーロッパの企業データベースの閲覧権利をとっており図書館内からの検索が自由にできるようになり、Gallicaは膨大な資料に利用者が迅速にたどりつくことができる電子図書館となってゆくことになる。電子化の問題点として、貴重本を写真や画像にすることや現物を守る作業が困難で、電子化のスタッフは25名であるが、まだまだ時間と人が必要だと思われる。これからも電子化を進める計画としても、20世紀以降の資料は著作権の関係上、実現には時間がかかることが予想される。このような問題点を抱えながら

も、最新技術を生かしたフランス国立図書館は、近代的建物とともに電子図書館として目覚ましい進展を見せているということができる。

最後に、英仏二つの図書館を比較した感想を記しておきたい。どちらも市民的で、伝統あるヨーロッパの現代的図書館であることは羨ましいほど感嘆することにおいて共通する。新大英図書館がロンドン都心の大英博物館一帯の便利で雰囲気の良いところにあるのに比べ、ミッテラン図書館は、いくら新カルチェ・ラタンと自称しようとも、都心から離れた寂れた地域にあることは否めない。しかしながら、ミッテラン図書館と新大英図書館の敷地、規模、スペースを較べると圧倒的にミッテラン図書館に軍配が上がる。実は、新大英図書館も最初の構想はもっと大きなものであったと新大英図書館の職員から聞いたことがある。最初の雄大な構想をばっさり切ったのは時の首相であった。首相の名はマーガレット・サッチャーであった。

(とくら かんじ 法学部教授)